

普通期水稻 田植から中干し前後管理

～田植え後管理の徹底により丈夫な稲を作ろう～

本年は入梅が遅く（平年入梅6月4日出梅7月19日）天候に注意が必要。梅雨が長い年は、いもち病、海外飛来性害虫の飛来回数が多くなり、短い年は、カメムシ、雑草の発生が多くなります。気象によって病虫害の発生状況が変化しますので対策をお願いします。

1. 田植後の管理

(1) 水管理	稲から見た水管理の理想は ① 活着促進のため<u>田植後3日間は水を切らさないように管理する。</u> ② ジャンボタニシ多発田では<u>浅水管理を行い、絶対に干しあげない！</u> ③ 田植後3日頃、除草剤散布前に、土中の有害ガス抜きも兼ねて<u>3日間程度軽く落水し、湛水し除草剤を散布（最低4日は水をためる）、その後は間断灌水（灌水4日、落水3日）を繰り返す。</u>
(2) 除草剤散布 (水稻暦参照)	初中期除草剤を使用する場合は、<u>基本は散布後7日間は深水で散布し、最低でも田面が見えない程度の水を溜めておく。</u>また、<u>散布後7日間は落水させない。（湛水時間が長いほど除草効果が高くなる）</u> 初中期除草剤散布後、雑草が生えてくる場合は<u>中後期除草剤を散布する。（落水が早いと効果も早く切れます。）</u>
(3) 病虫害対策	①いもち病・・・<u>曇雨天や低温が続く場合は十分注意すること！</u> 田植後に<u>余った苗（置き苗）が第一の発生源</u>になるため、植えつぎが済んだら<u>置き苗は早急に除去する。</u>また、育苗期間中にいもち病が発生していた場合は、<u>葉いもちに十分注意</u>する。 ◎いもち病本田防除薬剤 ・<u>ノンプラスフロアブル</u> 1,000 倍液（2 回以内 収穫 7 日前まで） ・<u>ブラシンフロアブル</u> 1,000 倍液（2 回以内 収穫 7 日前まで）
(4) ケイ酸加里の施用 (田植え前に散布している場合は不要)	基肥に散布してない場合は、<u>出穂45日前（中干し開始頃）を目安にケイ酸加里30kg／反を施用。</u> ケイ酸加里の施用により<u>病虫害や夏場の高温に負けない丈夫な稲体</u>になる。昨年のような夏場に高温が続く場合でも、<u>稲体自体の温度を下げる効果や、気温が低く日照時間が少ない条件下でも、光合成能力の向上</u>により十分な養分を生成し蓄えることができる。 登熟向上のために必ず施用しましょう！！

2. 中干しの時期・方法（最重要）

◆中干しの重要性

中干しは稲作りにおいて最も重要な基本技術。中干しが出来ていない田んぼで高品質・高収量は目指せない。中干しの重要性をしっかりと認識し確実に実施することで、中干し後の管理が適切に行える。

◆中干しの効果

- ①過剰分けつの抑制 ②土中の有害ガスの抑制 ③根を深く張らせる（根量増加）
- ④追肥が十分できるよう余分な窒素抑制 ⑤幼穂形成期の均一化（穂揃いを良くする）

◆中干し開始の目安

1 株分けつ本数が平均 16～20本になったら開始する。（完全落水、排水栓抜き実施）

1 株茎数が多すぎると倒伏や屑米増加の原因になります。

◆時期の目安・方法（田植え後30日頃が目安）

- ①夢つくし＝7月15日頃から ヒノヒカリ＝7月20日頃から行う。
- ②約7～10日間実施し、少しヒビが入る程度に行う。
- ④ 田んぼの高い所が白乾状態になった場合は、中干し中でも走水を行う。
- ⑤ 砂地は、一度に強く行わず、2から3回に分けて行う。

農薬散布は基準を守り、周辺作物への飛散に注意する！！

農作業事故には十分注意して作業を行うこと！！

栽培履歴の適正記帳・収穫前の提出を必ず行いましょう！！

問い合わせ 農畜産課 327-3912